

魯迅の政治的利用の全貌を解明する

藤井省三

魯迅が「狂人日記」を発表したのは一九一八年のこと、以来、魯迅文学の読書は九〇年以上の歴史を有する。魯迅が日本留学を記念するかのよう『域外小説集』を刊行したのは、帰国の年の一九〇九年のこと、当時の日本ジャーナリズムを代表する総合雑誌『日本及日本人』がいち早くこの中国語版の世界文学全集を紹介しているので、日本における魯迅読書史は一〇〇年を超すのである。

このように長い読書史において、七〇年以上も強い影響力を行使してきたのが、毛沢東（マオ・ツォートン、もうたくとう、一八九三―一九七六）による政治的利用である。それが猛威を振るつたのは毛沢東が「暴帝」として君臨した一九四九年以来三〇余年間の人民共和国だけではなく、日本においても同様であった。竹

内好（一九一〇―一九七七）ら戦後「知中派」知識人から六〇年代末の「全共闘」、そして過去の亡霊に憑依されたかのような現代の一部の批評家たちは、毛沢東以来の魯迅政治的利用の系譜に位置するものといえよう——少年時代の私も含めて。

毛沢東の死去と共に十年の文革が終息した一九七六年以後、中国における魯迅研究とは陰に陽に脱毛沢東を図り、毛沢東文体、式魯迅像から脱却することであった。日本における魯迅研究史もまた、丸山昇（一九三一―二〇〇六）の文学と政治の研究、丸尾常喜（一九三七―二〇〇八）民俗学の観点からの研究、さらには秋吉收、大東和重ら中堅・新進研究者らの比較文学的研究に至るまで、脱「毛文体」の試みであった。

しかし「毛文体」から脱するためには、

長堀祐造著
魯迅とトロツキー

——中国における「文学と革命」



A5判 472頁
平凡社 [3990円]

毛沢東による政治的利用の構造とその形成史を究明しなくてはならない。それは現代中国一〇〇年の政治・社会・文化を細心に読み直す——しかも前二者を主として——高度な人文・社会学の学知と強靱な根拠とを必要とする研究である。しかもミイラ取りがミイラになりにかねない、危険な作業でもある。このような毛沢東による魯迅の政治的利用の全貌解明という難題を見事に解いたのが、長堀祐造が半生の心血を注いだ『魯迅とトロツキー』なのである。

本書標題で魯迅と並称されるトロツキー（Lev Trotski、一八七九―一九四〇）とは、たとえば『広辞苑』第六版では「ロシアの革命家……一七年の二月革命後、

ポリシエヴィキに加入。ソビエト政府成立後、外務・陸海軍人民委員を歴任、赤軍の創始者となる。世界革命論を唱えるが、スターリンとの党内闘争に敗れ、二七一年党より除名、二九年国外に追放、メキシコで暗殺される。」と解説されている。

ソ連において中国革命問題はスターリン・トロツキー両派対立の主要論点の一つで、トロツキーは二〇年代半ばの中国国民革命における国民党右派の反動化に伴う一九二七年四・一二反共クーデターの事態を早くから予想していたという。

蒋介石クーデターによる国民革命の敗北を契機に、中共のソ連留学生らは中国トロツキー派を結成し、ソ連・コミンテルンと中共が中国革命を民主主義の枠内にとどめようとしたのに対し、永続革命理論に依拠して中国革命を社会主義革命として展望した。第二次国共合作に際してはコミンテルン路線を革命抑圧の合作であり、ブルジョワジーとの妥協で反革命の危険を伴うものと見なし、組織的軍事的独立を堅持した上での抗日統一戦線を

主張したとされる。

本書は「魯迅におけるトロツキー文芸理論の受容」と「トロツキー派に答える手紙」をめぐる諸問題」および「毛沢東文芸路線とトロツキー文芸理論」の三部から構成されており、全一〇章は一九八七年から二〇〇六年まで二〇年近くにわたり学会誌等に発表され、時に日本中国学会賞などを受賞し、時に「反革命トロツキスト」と誤読批判されてきた魯迅研究史において光り輝く論文の数々である。本書刊行に際し長堀氏が入念に補正の註釈を加えていることは言うまでもあるまい。

本書「序」はわずか四頁ながら、一九三七年魯迅逝去一周年記念会の講演で毛沢東が語った「魯迅は新中国の聖人だ」という言葉から魯迅の神格化が始まり、「いかなる権威をも恐れぬ魯迅の「骨の硬さ」に、不遇時代の自らを重ねるのかのように痛く共感していた」毛が、「権力掌握後は自己の権力保持に有利な限りにおいて魯迅を利用した」こと、日本でも竹内好は戦中の著書『魯迅』での「文学

■「台湾原住民族の音楽と文化」

国際学術シンポジウム

▼4月14日(出)15日(日)▼天理大学・天理大学附属天理参考館▼天理大学・天理大学附属天理参考館・国立台東大学主催▼一般参加自由入館料無料。シンボ参加費五〇〇円(二日通し)。

【4月14日】(天理大学附属天理参考館。10時受付開始)16時10分。*17時19時懇親会)基調講演「歌で書くー台湾原住民族の歌謡伝統について」(林清財)／新書発表と贈呈 天理大学附属天理参考館編「台湾、平埔族生活文化の記憶」／紹介「天理参考館所蔵台湾平埔族と原住民族の文物」(吉田裕彦)／「第一セッション」松岡格、鄧相揚、林志興／台湾原住民族音楽(口琴・鼻笛)の演奏

【4月15日】(天理大学第一会議室。9時15分受付開始)16時50分

「第二セッション」早坂文吉、渡邊昌史、梁忠銘、少妮瑤・久分勤分「第三セッション」陳芷凡、魚住悦子、森口恒一／総括講演「台湾原住民族の音楽と文化」(孫大川)

▼事務局・奈良県天理市守日堂町二五〇 天理大学附属天理参考館海外民族室・吉田裕彦 (0743-638414 メール: yhi@taeiri-u.ac.jp)／奈良県天理市袖之内町一〇五〇 天理大学国際学部下村研究室・下村作次郎 (0743-637412 メール: shinomus@taeiri-u.ac.jp)

主義的魯迅観をうち捨て」るなど、「戦後日本の魯迅研究は一部の例外……を除けば、大なり小なり、この枷を逃れることができなかった」と指摘する。

また魯迅の中共に対する立場をめぐっては、魯迅が「トロツキー理論に依拠しながら自らの革命文学論を展開し……中共主流の文学官僚からはトロツキストと非難され」たこと、「農民たちを共産党が殺している」と危惧し、「ソ連で進行中のスターリンによる粛清拡大に疑義を抱い」ていたため、ソ連での療養招請を拒否していたことを指摘し、「疑念と危惧を持ちながらも、当時の中国で唯一実体を備えた『進歩』勢力としての中共と、『同伴者』として協力せざるを得なかった」と指摘している。

そして「魯迅の文芸論や政治的立場を、トロツキー文芸理論や中国トロツキー派及び中共との関係性を媒介に、できる限りその時代背景において実証的に復元し、従来の魯迅論の偏差を補うことを目指す」と本書の目的を明確に語っている。

「序」に続けて第一部第一章以下の長

大な本論へと進む前に、思い切って四〇〇頁を跳躍し、巻末「終わりに」の章へと迂回するのが賢い読書法ではあるまいか。それは長堀氏が四〇二頁以下四頁ほどを費やして、以下のように各章の要約を行っているからだ。

第一部第一章から第四章では、まず魯迅のキーワード「革命人」がトロツキーの『文学と革命』日本語版に基づくことを確定し……魯迅におけるトロツキーの影響、痕跡を押さえた上で、魯迅がその革命文学論で『文学と革命』の理論的枠組みを援用していることを実証……第五章においては一九三二年以降、魯迅がそれまで高く評価してきたトロツキー引用を止めた背景に、中共の実権を篡奪したスターリン直系の極左指導部によって失脚させられ、左連工作に当たることとなった元中共指導者にして優れた文学者、翻訳家瞿秋白との交友があったのではないかと推論……第二部では「トロツキー派に答える手紙」の問題性を多面的に展開し、これを魯迅の作とすることの無理を、

馮雪峰、胡風という「手紙」作成現場に立ち会った証人の言から明らかにし……第三部では毛沢東の文芸路線、つまり「文芸講話」に示された教条主義的文芸路線と、毛沢東と魯迅に関わる問題を論じたことになる。ここでは期せずして、魯迅、毛沢東、トロツキー（及び中国トロツキー派）、そしてレーニンにまで登場願ひ、そろい踏みということとなった。

本書を毛沢東による魯迅の政治的利用に関する実証的研究と要約すると、無味乾燥な論述を予想される方もおられるだろうが、実は各章には驚くべき人間ドラマが溢れている。たとえば魯迅に替わって「トロツキー派に答える手紙」を執筆発表して同派に計り知れぬ打撃を与えた馮雪峰（フォン・シユエフォン、ふうせつほう、一九〇三―七六）も文学青年の時代には、実は魯迅の賛同を得た魯迅の弟子達によるトロツキー著『文学と革命』翻訳の有力な協力者であったこと（第一章）、しかし中共有力党員となったのは、このような中共の敵対党派に荷担し

てしまった負債を返さんとするかのように、病床で衰弱した魯迅に「手紙」への同意を「有無を言わせぬ勢いで承認を迫った」のだ。しかもその日魯迅の家を出るなり「魯迅はまだまだだ、ゴリーキーには及ばないよ。ゴリーキーの政論はみんな党が送り込んだ秘書が書いたもので、ゴリーキーは署名するだけなんだ」と囁く馮の姿からは、文学青年の片鱗も窺うことはできないだろう。このように魯迅の政治的利用に腐心していた馮雪峰も、人民共和國期の権力闘争に敗れて肅清されたのちは、「手紙」とは魯迅により事後承認されたに過ぎないことを告白し(第七章)、獄友に「毛は生涯魯迅を理解しなかった」と酷評さえしている。しかし意外にも長堀氏は、人民共和國期に「魯迅がまだ生きていたら」どうだったかという質問に「監獄に入れられてもお書こうとしているか、〔大勢を理解して〕沈黙しているかのどちらかだろう」と答えた毛沢東の魯迅理解を、「永久革命者魯迅の思想的政治的な本質は見抜いていたと言っべき」と馮雪峰のそれより

も高く評価するのである。

長堀氏は、「一九五二年、中国トロツキー派は大陸から一掃され、現在はずかに香港の民主派内の小勢力として残存するに過ぎない。しかし〔中国で同派研究が解禁された〕今や中共の批判勢力としては最も先鋭な合法的存在となった。中国トロツキー派の掲げる民主と人権の旗は実は結成以来の彼らの伝統でもある」と指摘しており、現代中国の民主化という一大テーマにおいて、魯迅文学をめぐって政治と文学が再び激しく切り結び事象も預言している。

「中共・毛沢東に政治的に利用し尽くされ、昨今は中国大陸でも形勢の悪い魯迅を、遅きに失したとはいえ、中共・毛沢東及びスターリン主義の陷穽から救出せんとする試み」(本書序)は十分に達成されたといえよう。

(ふじい・しょうぞう 東京大学)



■受け継がれる東洋の至宝 Part I

東洋絵画の精華―名品でたどる美の軌跡

▼静嘉堂文庫美術館(東京都世田谷区岡本二―三三) / ☎03・3700・0007 / <http://www.seikado.or.jp> ▼4月14日(土)

5月20日(日) 珠玉の日本絵画コレクション ▼4月23日(火) 6月24日(日)至高の中国絵画コレクション

5月23日(火) 休館日・毎週月曜日(4月30日は開館)、5月1日(火)、5月22日(火) ▼午前10時(午後4時30分(入館は午後4時まで)) ▼一般八〇〇円 大高生五〇〇円・中学生以下無料

*岩崎彌之助・小彌太父子二代によって蒐集された、およそ千件の絵画コレクション・ク

ション。本展では、国宝・伝馬遠「風雨山水図」や重文「平治物語絵巻(信西巻)」をはじめ、初

公開作品を含む、選りすぐりの中国・日本絵画の名品、約七〇件を展示。

◆講演会「岩崎コレクションの日本絵画」 ▼4月30日(月・祝)午後1時30分から ▼地

階講堂にて、先着―一五〇名 ▼演題「岩崎コレクションの日本絵画」(講師・辻惟雄氏・

Miho Museum 館長)

◆講演会「静嘉堂コレクションとの出会い」 ▼6月3日(日)午後1時30分から ▼地階講堂

にて、先着―一五〇名 ▼演題「静嘉堂コレクションとの出会い」(講師・湊信幸氏・東京国立博物館名誉館員・客員研究員)

立博物館名誉館員・客員研究員)